

東山動植物園再生プラン基本構想

名古屋市

目次

はじめに	1
1 21世紀動植物園の新たな役割	2
2 再生プランのスキーム	3
(1) 再生プランの目指すもの	3
(2) 再生プランを支える4本の柱	4
(3) 再生プランとは	7
3 東山動植物園の再生	8
(1) 基本理念	8
(2) 東山動植物園の使命	8
(3) 再生の基本方針	9
(4) 東山動植物園の目標	11
4 構想の実現に向けて	12
5 再生のスケジュール	12
参考イメージ	13
[参考]	14
1 東山動植物園の現状	14
(1) 展示施設	14
(2) 保有種	15
(3) 入園者数	15
(4) 教育、学習その他の活動	15
(5) 広報宣伝活動	16
(6) 地形	16
(7) アクセスと駐車場	17
2 なごや東山の森づくり基本構想	18
3 東山動植物園再生検討委員会	20

はじめに

動・植物園といえば、かつては、世界各地の動植物を収集してきて、来園者に見せることが中心でした。しかしながら、環境の世紀といわれる 21 世紀を迎え、世界的に動・植物園自体の果たすべき役割、使命が変わってきました。

これからの動・植物園は、生物多様性が失われつつある、今こそ、「人と自然をつなぐ場」としての機能を発揮していく必要があるのです。

環境首都なごやを目指すとともに、人・物・情報・資本が国内外から大交流するまちを目指す本市は、国内最大級の 410 ヘクタールの「なごや東山の森」に包まれ、70 年にわたり市民の皆様が親しまれてきた東山動植物園を、環境と大交流の融合する舞台として、再生することを決意しました。

再生に当たっては、幅広い分野から、斬新な知見を頂くために、動物学、植物学、環境学、森づくりなどに造詣の深い 13 名の有識者の方々を東山動植物園再生検討委員に委嘱しました。検討委員の皆様は、1 年間にわたって、21 世紀の東山動植物園のあり方について、熱心に議論していただき、平成 18 年 3 月 20 日に東山動植物園再生プラン基本構想の提言をいただきました。

本市は、提言を踏まえ、東山動植物園再生プラン基本構想を取りまとめました。



1 21世紀動植物園の新たな役割

今、世界の動物園・植物園はかつてない大きな岐路に立っています。

人間活動に起因する急速な地球・自然環境の変貌の中で、自然系博物施設である動物園・植物園が、環境の世紀といわれる21世紀、新たな市民需要に応えるために如何にすべきかが問われているからです。

振り返ってみますと、市民に開かれた近代動物園が登場したのは19世紀初頭ですが、当時、研究者専門家は勿論、一般市民に圧倒的な支持を得ています。なぜならば、16世紀以来の自然科学を担ってきた博物学が、資料と言えば剥製標本、骨格標本など“動かない資料”で、一般の市民にとっては無縁のものであったのに対し、新たに登場した動物園は“動かない資料”ではなく、生き生きとして動く“生きた資料”が眼前に展開する画期的なものであったからです。

近代動物園・植物園が調査研究の場であるだけでなく、自然科学を市民に近づけ、自然科学の導入口として大きく機能してきたことは、動物園施設の利用者が世界各地で年間約6億人（世界人口の約10分の1）に達するという一事をもっても容易に理解できるでしょう。事実、国際博物館会議(ICOM)は、博物館の果たす役割として調査研究(STUDY)、教育普及(EDUCATION)と並んで楽しみ(ENJOYMENT)をあげていますが、この背景に近代動物園・植物園の果たしてきた成果が大きく影響していることは想像に難くありません。人は楽しみの中でこそ多くのものを発見し学ぶものだからです。

しかし、20世紀後半、産業革命以降の急速な自然開発の負の遺産が地球全体を覆い、地球人口の半分以上が都市に住むという自然との乖離現象のなかで、自然破壊どころか人間の生存基盤さえ危うくする状況が生まれてきました。1972年のストックホルムにおける「人間環境宣言」、1992年のブラジル・リオデジャネイロにおける「リオ宣言」、そして2000年、オランダ・ハーグで発表された「地球憲章」は、このような地球環境変化に対する人間対応の方向性を示しています。

現代の動物園・植物園の21世紀的役割は、これらの方向性の延長線上にあると考えます。即ち、従来のSTUDY、EDUCATION、ENJOYMENTを土台としてしっかり継承しながら、21世紀動植物園の新たな役割として「人と自然をつなぐ場」としての機能を加えるべきであると考えます。そして、この四つの役割がそれぞれに響きあい重なり合って融合したときこそ、21世紀の市民需要に真に応えうる再生が可能になると考えます。

2 再生プランのスキーム

(1) 再生プランの目指すもの

東山動植物園再生の目指す方向である「人と自然をつなぐ場」としての機能は従来の動・植物園の機能にはなかった新しい役割概念と言ってよいでしょう。勿論、従来の動・植物園にも調査研究、教育普及、娯楽、自然保護の4機能が上げられ、自然保護への貢献も重視されてきたことは明らかですが、「人と自然をつなぐ場」を軸として従来の4機能を包含再生するという発想は、まさに環境の世紀といわれる21世紀に適合する新しい計画の機軸にふさわしいものと考えます。

この考えに至った理由は3つあります。1つ目は東山動植物園が、その名前のおり、動物と植物という代表的生物の二分野の施設を併せ持っているという事実です。新しいテーマである「人と自然をつなぐ場」としての機能を発揮するために、これほど恵まれた条件はないでしょう。言うまでもなく、自然の中に動物だけ、植物だけという偏った存在はありません。生物界は動物、植物、それをつなぐ多様な生物群によって構成されており、そのバランスの中でこそ健全な生態系が構築されるのです。動物園と植物園の融合は、従来、単独の施設では果たせなかった環境教育を可能にするだけでなく、そこを訪れるすべての人に「生き物としての実感と心地よさ」を体験させてくれると考えます。動物園と植物園を併せ持つ東山は従来の両園協力の姿勢を基本的に見直し、融合の実を挙げることによって類例のない新しい世界を演出できると考えます。

2つ目は、東山動植物園の立地条件が「人と自然をつなぐ場」としての機能を発揮する上で極めて良好な位置にあるということです。東山動植物園は「東山公園」に位置していますが、隣接する「平和公園」と併せますと410ヘクタールに達する日本有数の大緑地（東山の森）の中に存在し、動・植物園の目指す新テーマを拡大強化していく上で、恰好のロケーションと言ってよいでしょう。幸い、平成15年7月には、「東山の森」の今後の方向性を示すものとして、なごや東山の森づくり基本構想がまとめられており、この理念は「人と自然をつなぐ場」としての機能と奇しくも一致しています。この両案が調和し、響きあうことで従来にない新しい空間を市民に提供できると考えます。



3 つ目は、愛知万博を未曾有の成功に導いた市民の先見性と市民パワーです。博覧会のテーマとして環境問題は負のイメージが強く、成功は困難視されていましたが、結果は大成功でした。マイナーなテーマであっても、理念がしっかりしていて、社会的需要を的確に捉えていれば成功することを実証したのです。「人と自然をつなぐ場」というテーマも決して華やかではありませんが、その理念周知と市民理解があれば、愛知万博の先見性と市民パワーは、ここでも発揮されるに違いありません。

「大交流」は、人と人、人と自然、そして地球に広がるスケールの中でこそ真価を発揮できるものと考えます。

(2) 再生プランを支える 4 本の柱

先に述べた 3 つの要件を兼ね備えていることから、東山動植物園は「人と自然をつなぐ場」としての機能を発揮することができる可能性を大いに有していると考えられます。そして、東山動植物園が生まれ変わるに当たっては、次の 4 本の柱が基礎となります。

ア 動・植物園の使命の変化

かつて、動・植物園は、世界各地の動植物を収集してきて、囲いの中に閉じこめて来園者に見せるものでした。しかしながら、動・植物園の使命は、「人と自然をつなぐ場」に変わってきました。

この地球に生物が誕生してからおよそ 40 億年が経ちます。その間、生物は環境に適応しつつ、進化し、種を分化させて現在に至りました。膨大な時間の中で、絶滅した種も限りなくありますが、近年における生物多様性保全の問題は、過大に発達した私たち人間の行為が一方的に生物種に影響を与え、しばしば絶滅までを引き起こしていることにあります。地球上には私たちが存在も知らぬまま絶滅し、その貴重な生物情報とともに失われていく種も数多くあります。直接間接を問わず、様々な人間活動、人為の影響によって、生物多様性保全上の危機、問題が引き起こされます。

しかし、こういった地球環境問題に関して、1972 年ストックホルムで国連人間環境会議が開催されて以来、環境保護への取組みの必要性が訴え続けられていますが、相変わらず危機的な状況は続いています。それは、環境を破壊することで、多くの生物種が絶滅し、ひいては、人類そのものの生存すら危うくなるかもしれないというのに、多くの人は、自分の問題としてでなく、遠い世界

のことと考えると、行動しないからです。実際、環境保護に関する活動、講演会等においても、未だ一部の人の参加にとどまっています、分かってもらいたい人の参加は少ないのではないのでしょうか。

しかし、動・植物園は、世界の多様な生命（いのち）に触れあうことができ、性別、年齢に関わらず多くの人々が訪れる場所です。そこでは、来園者は、現実の動植物を見たり、触れたりすることにより、意識せずに自然の素晴らしさや、自然の大切さを実感することができます。

つまり、動・植物園は、人が自然とつながっていること、人が自然の一部であるということを実感するには最も適した場所なのです。

したがって、東山動植物園は、生物多様性が失われつつある、今こそ、「人と自然をつなぐ場」としての機能を果たさなければなりません。



イ 過去の蓄積の再評価と活用

広大な動物園と植物園が隣接する東山動植物園は、昭和12年の開園以来、無柵放養形式のライオンの放飼場などに代表されるように「東洋一の動物園」、「東洋一の水晶宮（温室）」といわれ、ゾウ列車、ニコニコサーカス、ゴリラショーなどの素晴らしい歴史を持ち、平成19年には開園70周年を迎える動植物園です。



また、全国でもトップクラスの動植物展示数を始め、世界のメダカ館といった世界でも珍しい展示施設や、日本最初の理学博士である伊藤圭介の学術資料といった東山にしかないコレクションを所有する一方、絶滅危惧種を含めて多くの動物を繁殖させた実績に証明される素晴らしい飼育技術を有し、小学生向け

のサマースクールを 40 年間にわたり開催するなど、教育・学習活動にも力を注いできています。

さらに、都市の緑地としては日本最大級である東山の森 410 ヘクタールに包まれたこの上ない自然環境に立地し、鉄道交通、自動車交通いずれのアクセスにも恵まれ、節目節目の周年事業、毎年の春まつり、秋まつりに多数の方々が来園されるなど、1 億 4000 万人の累積入園者数を誇る日本有数の動植物園であり、名古屋市民はもとより、この地域の人々の心のふるさとであり、特別に思い入れのある場所です。

したがって、過去から蓄積した素晴らしい有形、無形の財産を再評価し、これらの財産をこれまで以上に活かしながら、東山動植物園を再生していきます。

ウ なごや東山の森づくり基本構想の理念の尊重

なごや東山の森づくり基本構想は、22 世紀に向けて森を守り育て、森と関わり、森づくりを生かすことによって、次世代を担う子どもたちに森の素晴らしさや大切さを伝え、市民一人ひとりの参画のもと、市民・企業・行政が協働して人と自然の生命（いのち）輝く魅力豊かな東山の森づくりを進め、共生型社会の実現を目指すものであり、将来に向けて具体化していく東山の森づくりの大きな礎となるものです。したがって、東山動植物園の再生に当たっては、基本的な理念に共通性を有するなごや東山の森づくり基本構想を最大限尊重するとともに、市民との協働というプロセスを学びながら進めていきます。



Ⅱ 愛・地球博の理念の継承

「自然の叡智」に学び、地球的課題を克服しようというテーマを掲げた愛・地球博は、国内外から2,205万人の人々が会場を訪れ、昨年、閉幕しました。

愛・地球博では、最先端技術が地球的課題の解決にどのように役立つかを体験できました。自然や環境に配慮した新しい生活の仕組みを実感できました。NGOや市民の方々に積極的に参加していただき、一人ひとりの活動が地球的課題解決に如何に大切かを共感できました。さらに、多様な文化と価値観を理解しあい、許容しあうことの大切さを共有できました。

愛・地球博で培われたこのような成果を、未来へ引き継ぎ、さらに発展させなければなりません。名古屋市は、環境首都なごやを目指すとともに、人・物・情報・資本が国内外から大交流するまちを目指しています。したがって、この成果を引き継ぐべき舞台は、同じ愛知の地、東山動植物園であると考えます。



(3) 再生プランとは

東山動植物園の再生は、動・植物園の使命の変化、過去の蓄積の再評価と活用、なごや東山の森づくり基本構想の理念の尊重、愛・地球博の理念の継承という4本柱の上に成り立つ、環境と大交流の融合する舞台を目指すものです。したがって、東山動植物園の単なる改築計画であってはなりません。東山動植物園の再生（＝生まれ変わり）を核として、その周辺の東山の森の森づくりを目指すべきものでなければなりません。さらには、東山動植物園の再生により、再び賑わいを取り戻す、周辺地区のまちづくりや活性化なども視野に入ってきます。

つまり、再生プランは、東山動植物園の再生及びそれを核とした東山の森づくりを行うとともに、ひいては、その周辺地区のまちづくりを目指すものです。

3 東山動植物園の再生

(1) 基本理念

基本理念は、環境の世紀といわれる 21 世紀における動植物園そのものの存在意義を示すものです。

生命（いのち）をつなぐ
—持続可能な地球環境を次世代に—

動植物園は、自然と乖離してしまった社会環境の中で暮らす都市の住人の渇きを癒すところであり、行けば、理屈なく楽しく、ホッとする、憩いの場でなければなりません。そして、結果として、自然の素晴らしさや大切さを学習し、さらに、それが、生物多様性の保全やサステイナブル・フューチャー*につながる場でなければなりません。

これからの動植物園の使命は、「人と自然をつなぐ場」となり、生命（いのち）の大切さや、生命の源である地球（自然）の大切さを伝え、持続可能な地球環境を次世代につなげていくことです。

そこで 基本理念を「生命（いのち）をつなぐ～持続可能な地球環境を次世代に～」とします。

* サステイナブル・フューチャー 持続可能な未来。現在の地球環境が、今の世代だけのためにあるのではないことから、持続可能な地球環境を次の世代に受け継いでいくこと。

(2) 東山動植物園の使命

基本理念及び東山動植物園を取り巻く社会環境、時代背景などから導き出される東山動植物園の果たすべき使命は次の 2 つに集約されます。市民と協働して、この 2 つの使命を果たします。

- 環境 なごや東山の森づくりや愛・地球博の経験を活かし、人間と自然の関係を感じられる空間として、人と自然をつなぐ場となる。
- 大交流 世界との大交流の拠点になるとともに、市民の心のふるさととして、人と人をつなぐ場となる。

(3) 再生の基本方針

東山動植物園が、人と自然をつなぐ場となり、大交流の拠点となるためには、様々な垣根を取り払い、生まれ変わる必要があります。市民のための動植物園ですから、動植物を通じて、市民の皆様に、いかに楽しんでいただけるか、いかに喜んでいただけるか、いかに感動していただけるかを最優先に考えて、再生します。

そこで、基本方針を次の6つとします。

ア 「見るもの」と「見られるもの」の垣根の除去

「見る」人間と「見られる」動物の垣根を取り払い、来園するだけで自然とつながっていることを実感でき、生き物と空間を共有していることを体感できる動植物園とします。

そのためには、動物とのふれあいを大切にしたり、動植物の生息域を再現し、環境エンリッチメント*に配慮するなどして、生き生きとした動物の姿に接することのできる動植物園とします。

* 環境エンリッチメント 動物福祉の立場から、飼育動物の幸福な暮らしを実現するための具体的な方策

イ 希少動物の「保護」と「増殖」への貢献

希少動物の保護と増殖は、動物園に課せられた大事な役割のひとつです。今後も、動物園は、数が少なくなり絶滅しそうな動物たちに、生息地の外でも生きていける場を与える、現代の方舟の役割も果たしていかなければなりません。

そのためには、国内だけでなく海外とでも動物園どうしで動物を貸したり借りたりすることも積極的に取り組んでいきます。また、可能ならば野生にも戻せるように増殖させ維持していくことも必要と考えます。

動物は、動物園のものではなく、市民の大事な財産です。地球上の動物を守って、次の世代に伝える責任を果たすことのできる動物園を目指します。

ウ 「娯楽」と「学習」の両立

動植物園は、理屈なく楽しく、ホッとする、憩いの場でなければなりません。なぜなら、楽しくなければ人は来ないし、人が来なければ、どんな素晴らしいメッセージを発信しても伝わらないからです。しかし、楽しいだけの動植物園では存在価値がありません。動植物園の主役である子どもたちはもとより、大人にとっても、楽しくてためになる、感動を与えられる動植物園を目指します。

ただし、その楽しさも、ただ単に俗っぽいものではなく、科学的な裏付けがある楽しさでなければなりません。そのためには、飼育担当者等の生息地等における体験の充実、大学や研究機関との連携を今後検討します。また、来園者が動植物について学習するためのプログラムや教育施設の充実も検討します。

エ 「動物園」と「植物園」の融合

自然は動物だけでも植物だけでもなく、動物と植物の双方があって初めて成立します。したがって、広大な動物園と植物園が近接し、かつ、動物園と植物園が同じ組織にあって双方の専門家が協力できる利点を十分に生かして、自然本来の姿を実感できる動植物園とします。

様々な植物と鳥や昆虫などの生き物が共生する空間を作り上げたり、動物園の中を植物で満ちあふれさせたり、植物園の中にさりげなく動物がいるような「動物園」と「植物園」が融合し、文字通り「動植物園」といえるようなものを目指します。

オ 「東山の森」と「動植物園」の一体的活用

動植物園の再生を核として、なごや東山の森づくり基本構想の理念を推進し、動植物園と東山の森の相乗効果が図れるよう東山の森全体を活用します。動植物園で実施している各種の教育活動を、東山の森で実施するなど、410ヘクタールの東山の森を活用します。

例えば、日本の原風景である里山を市民と協働して創り、育て、体験することによって、人と人、人と自然のつながりを理解することができます。また、動植物園の動植物だけでなく、広く東山の森の自然を対象とした環境教育、種の保存、調査研究のための活動拠点を設置し、大学などの研究機関との連携やボランティアとの協働を図ることも検討します。

力 「市民」と「行政」の協働

市民（民間企業を含みます）と行政が連携、協働して運営することにより、市民の皆様が「自分たちの動植物園」と実感できる動植物園を目指します。

そのためには、協働の前提となる行政の方針などの情報公開や情報提供を行うべきことはいうまでもありませんが、市民の提案を行政が取り入れる仕組みを如何に作っていくかについて、森づくりの経験を活かして、今後、市民と行政でともに考えていく必要があると考えます。

(4) 東山動植物園の目標

人と自然をつなぐ懸け橋へ

東山動植物園は、自然と乖離してしまった社会環境の中で暮らす都市の住人の渴きを癒すところであり、行けば、理屈なく楽しく、ホッとする、憩いの場でなければなりません。そして、結果として、自然の素晴らしさや大切さを学習し、さらに、それが、生物多様性の保全やサステイナブル・フューチャーにつながる場とならなければなりません。したがって、東山動植物園が「人と自然をつなぐ懸け橋」に生まれ変わることを目標とします。

将来、東山動植物園が「人と自然をつなぐ懸け橋」に生まれ変わる日が来たら、そのことを象徴する意味で、例えば「動植物園」から「ライフパーク」に名称を変更することや愛称を設定することなどを検討します。その際には、市民、議会の意見を十分に聴くことは当然ですが、特に動植物園の主役である若い世代の感覚を大切にすることが必要であると考えます。

4 構想の実現に向けて

(1) 東山動植物園が「人と自然をつなぐ懸け橋」に生まれ変わるためには、施設を改修するだけでは不十分です。ハード面だけでなく、ソフト面でも改革を進めていく必要があります。そのために、動植物園の資源や職員の意欲を最大限活かすことのできる、チャレンジの出来る組織体制やマネジメントを確立します。また、資金を調達するうえにおいても、ネーミングライツ（施設命名権）、ファンドなど民間企業等との協働を検討します。

(2) その他、今後基本計画において、下記の課題を具体的に検討します。

ア 動植物園に関して

- ・ 動植物園の規模
- ・ 保有種類数の絞込みの是非
- ・ 入園者数の想定
- ・ 展示手法のあり方
- ・ 園内移動手段
- ・ 遊園地、子ども動物園のあり方
- ・ 省資源、エネルギー循環に配慮した施設整備 など

イ 東山の森に関して

- ・ 東山の森の連続性の実現（園内分断道路の解消、生態系の連続性）
- ・ 環境学習、体験学習の場としての活用 など

ウ 交通アクセスに関して

- ・ 公共交通機関の利便性向上
- ・ 駐車場の統廃合を含めた再整備 など

エ 周辺地域との連携に関して

- ・ 地下鉄東山公園駅から動植物園正門前の整備
- ・ 地下鉄星ヶ丘駅、星ヶ丘地区との連携 など

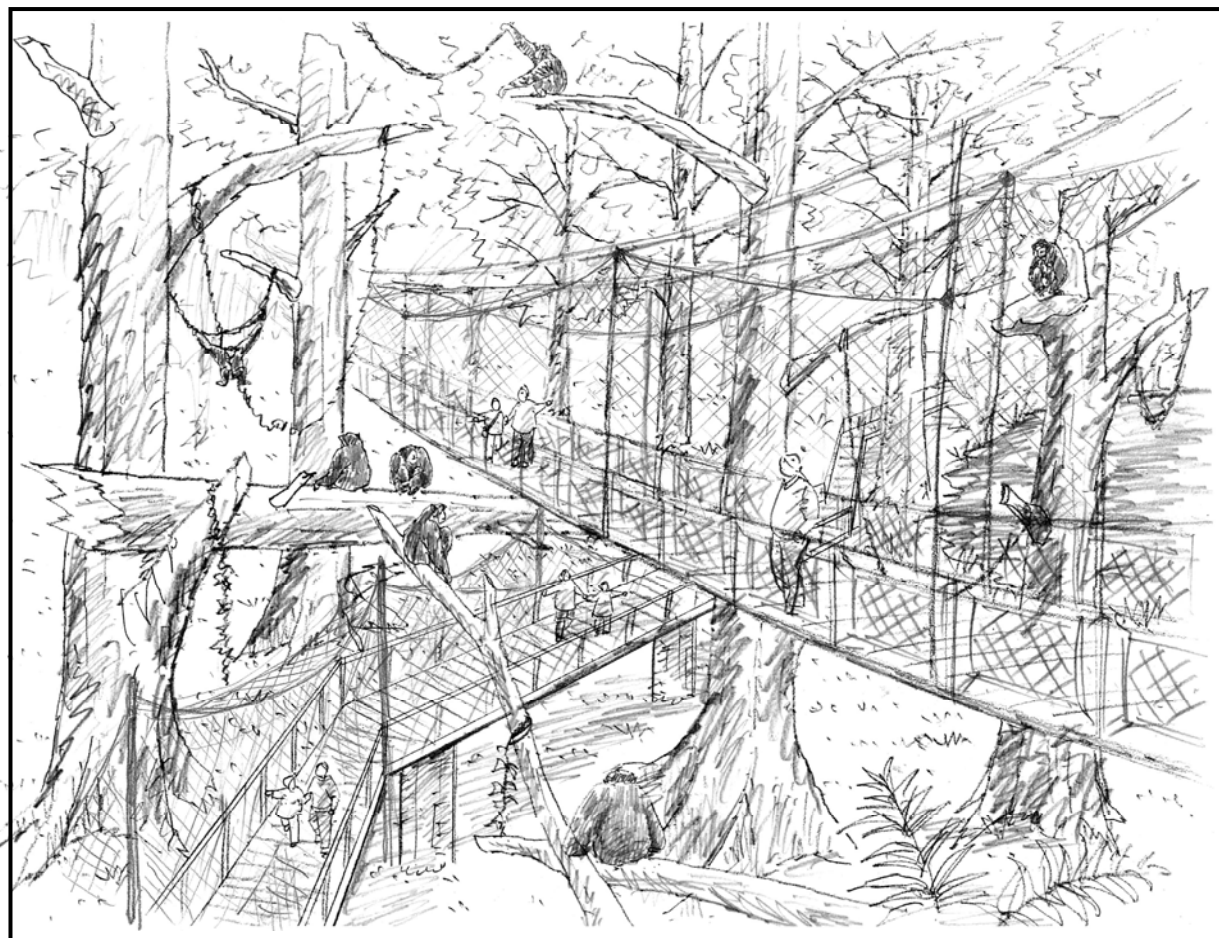
5 再生のスケジュール

開園 80 周年となる平成 28 年度の再生完了を目指し、以下のとおり進めて行く予定です。

平成 18 年度(開園 70 周年)	【基本計画】
平成 19 年度	【基本設計・実施設計】
平成 20 年度	【第 1 期工事着手】
平成 28 年度(開園 80 周年)	【動植物園区域の再生完了を目指す】

参考イメージ

〈キャノピーウォーク〉



このイラストは、東山動植物園再生検討委員会の提言から引用したものです。

多くの類人猿、サルを、その生息環境を再現した施設の中で飼育し、その中に、つり橋も含めて、いろいろな高さ、方向、幅の通路を設置して、お客さまに歩いていただくことで、「見るもの」と「見られるもの」の垣根を取り払い、逆に動物に観察されているような、野性の世界に迷い込んだような感覚に浸っていただくことをイメージしています。



マレーシア・コタキナバルのキャノピーウォーク

【キャノピーウォーク】

もともと熱帯雨林の樹冠 (canopy) 部分を調査するために設けられた、木々の間に張り渡したつり橋状の渡り廊下のこと。地上より、はるか上に設置されているため鳥と同じ目線で森を観察できる。

参 考

1 東山動植物園の現状

先に述べたように、東山動植物園は、過去から蓄積した素晴らしい有形、無形の財産を有していますので、それらの財産をこれまで以上に活用していく必要があります。そこで、以下の項目に分けて、東山動植物園の現状を分析しました。

(1) 展示施設

動物園は、主に本園と北園から構成されています。このうち本園は、開園当時から供用されてきたエリアで、主に動物の分類群ごとの展示となっており、施設や獣舎等の老朽化が特に目立つエリアとなっています。北園は、アメリカ大陸コーナーとアフリカ地区、自然動物館、世界のメダカ館があり、このうちアメリカ大陸コーナーは、比較的新しく展示スペースも他に比べてゆとりがあり、自然動物館と世界のメダカ館は十数年前に建設されたそれぞれ特徴を持った展示施設です。しかし、全体的には、見るものと見られるものを明確に区別する、コンクリートや金網で囲まれた狭隘な獣舎が目立ち、魅力低下の要因となっています。



植物園は、温室、洋風庭園、和風庭園、各種見本園などにより構成されており、多くが東山の森と一体的に整備されているため、施設の老朽化はさほど目立ちません。しかし、現存する温室では日本最古で、東洋一の水晶宮と呼ばれた温室は、現在でも美しい姿を残しているものの、かなり老朽化が進んでいます。また、植物が十分に伸びる空間がない、あるいは健全に生育できないなど十分な環境を用意しているとはいえません。

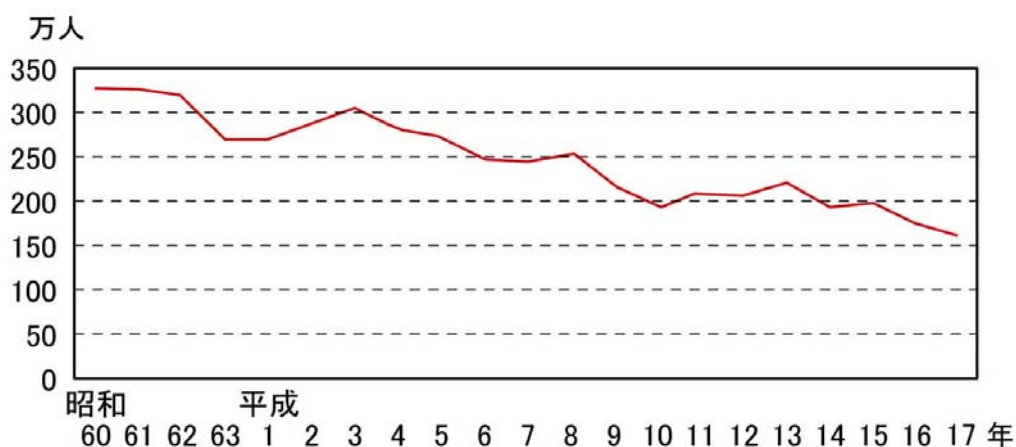


(2) 保有種

保有種は、動物園 555 種、19,318 点、植物園 7,057 種（それぞれ平成 16 年度データ）と非常に充実しています。しかし、この充実したコレクションが、必ずしも動植物園の魅力につながっていない点は問題です。特に動物園においては、限られた敷地内で多くの種類を展示しているため、個々の展示スペースが十分でなく、動物の行動を十分に観察できないなど、魅力の低下にもつながっています。環境エンリッチメントの面からも、動物の個性に合わせた展示空間の確保が必要といえます。

(3) 入園者数

入園者数は、昭和 60 年代は 300 万人台を維持していましたが、平成 17 年度は 165 万人と減少傾向にあります。



(4) 教育、学習その他の活動

小学生向けのサマースクールを昭和 40 年から、40 年間にわたり開催するなど、教育・学習活動に力を注いできています。また、入園者がゾウ、キリン、カバなどにエサをやるイベントや普段見られない獣舎の裏側を探検する体験型のイベントを多数開催しています。さらに、平成 4 年度から、登録者数 250 人（平成 17 年 4 月）を越すガイドボランティアが、来園者に同行して園内ガイド等を行っています。

しかしながら、教育、学習に専念するスタッフがいらないなどの組織的な課題を抱えています。

(5) 広報宣伝活動

東山動植物園は、既に述べたように素晴らしい資産に恵まれています。実際に入園していただき、自然の素晴らしさや大切さを感じてもらわないと、宝の持ち腐れになってしまいます。そこで、その素晴らしい資産や前述のイベントを市民にPRする広報宣伝部門が重要ですが、現時点では、十分に機能しているとはいえません。

(6) 地形

東山動植物園は、敷地の大部分が丘陵地であり部分的に急な斜面も見られます。このような地形は、東山の森の優れた景観を構成する一方、来園者の移動に制約を与えています。また、動物園の本園と北園、植物園が道路により分断されて一体性のない園内空間が形成されています。さらに、園内の動線が迷路のように複雑化し、効率よく園内をまわることが難しい状況にあります。



図1 地形図

(7) アクセスと駐車場

公共交通機関によるアクセスは、市の中心から近く、地下鉄東山線の駅に隣接しており、極めて利便性が高いといえます。しかし、駅と正門の間に車道が走り、入園者が車道を横断しなければならないなどの問題点もみられます。また、団体バスなどの乗降スペースも十分ではありません。さらに、駐車場は、動植物園の拡張に伴い増設を繰り返したため、小規模な駐車場が分散しています。駐車容量も十分でなく、それぞれの駐車場の空車状況を把握しにくいことから、来園者にとって、非常に利用しにくい駐車場といえます。また、この駐車場の分散化は、動植物園の各門（出入口）の増加要因ともなっており、運営の非効率化をも招いています。地下鉄の駅からの経路、各門の配置、周辺の道路のあり方など総合的な改善が望まれるところです。

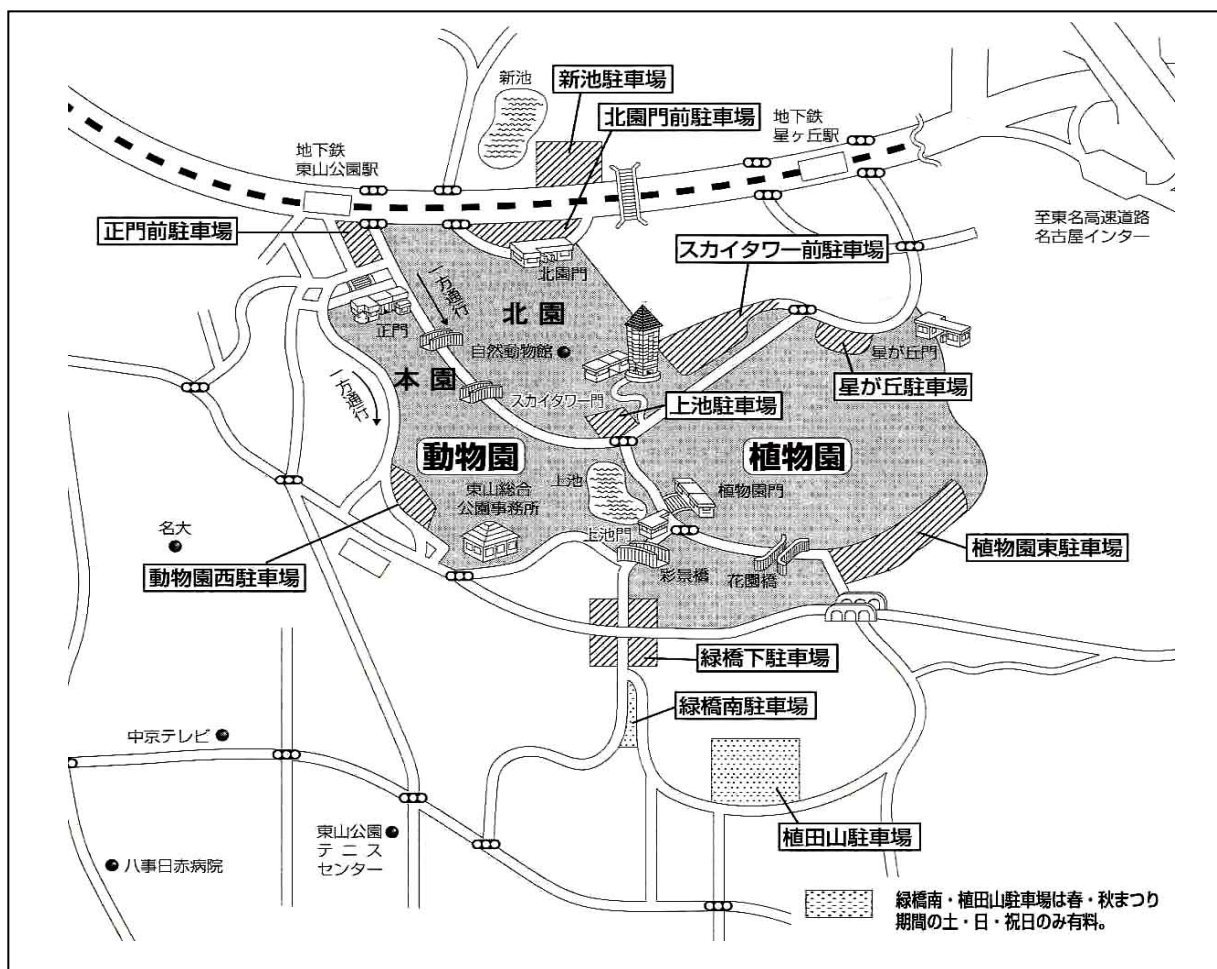


図2 駐車場及び門（出入口）位置図

2 なごや東山の森づくり基本構想

東山動植物園の立地する「東山公園」と、隣接する「平和公園」とを合わせた410ヘクタールもの面積を有する東山の森は、里山的な景観を呈し、名古屋を代表する大きな緑のまとまりであるとともに、市街地に囲まれた都市の緑としては日本最大級のものであります。本市は、この東山の森に新たな価値を見だし、「人と自然」、「都市と緑」とが「共生」する環境の時代にふさわしいまちづくりの具体化を図るべく、市民・学識経験者・企業の方たちとともに案をつくり、平成15年7月に「なごや東山の森づくり基本構想」を策定しました。

「なごや東山の森づくり基本構想」の基本理念及び基本方針並びに森づくりの地区別テーマとイメージは次のとおりです。

基本理念：「人と自然の生命(いのち)輝く東山の森づくり

～森づくりから共生型社会の実現をめざす～」

基本方針：「協働して魅力豊かな森づくりを進める」



イメージ

市バス「光ヶ丘」

平和公園北部(墓園)地区
へいわの森
～猫ヶ洞池に臨む憩いの園～

平和公園南部地区
くらしの森
～身近な自然を体感するふるさと～

地下鉄「東山公園」

地下鉄「東ヶ丘」

東山公園北部(動植物園)地区
ふれあいの森
～なごや東山の森への入口～

東山公園中部地区
いのちの森
～自然環境を再生し生き物を育む丘～

東山公園南部地区
うるおいの森
～自然とのつながりを感じる八事裏山～

自然散策、史跡散策などで憩える、平和と安らぎの森にします。

森と調和したくらしを学び、里山の生活体験ができる森にします。

情報発信・交流・参加の拠点を設けるとともに、環境共生型の動植物園で世界の動植物とふれあえる森にします。

環境学習や自然環境の再生などを通じて、命の大切さを実感できる生物多様性の高い森にします。

湿地や樹林地などの保全・再生を図り、自然と人のつながりを発見できる潤い豊かな森にします。

東山の森 自然散策路

今ある東山公園と平和公園の一万歩コースなどを生かし、東山の森全体をつなぐ自然散策路を設けます。

つながり緑地帯

東山の森全域の外縁部において、森のまとまりを保全するとともに、周辺市街地へ向けて進める緑の回廊づくりの起点として育てていきます。

3 東山動植物園再生検討委員会

(1) 検討委員名簿

氏名（敬称略、五十音順）		◎座長
ありが 有賀	たかし 隆	名古屋大学大学院環境学研究科助教授
いわつき 岩槻	くにお 邦男	兵庫県立人と自然の博物館館長、東京大学名誉教授
えだひろ 枝廣	じゅんこ 淳子	環境ジャーナリスト、(有)イーゾ取締役、(有)チェンジ・エージェンツ代表取締役、ジャパン・フォー・サステナビリティ共同代表
ジョン・ギヤスライト		エコロジー空間プロデューサー、ツリークライミングジャパン代表
すだ 須田	ひろし 寛	東海旅客鉄道(株)相談役
たきかわ 滝川	まさこ 正子	協働組織「なごや東山の森づくりの会」代表
たけした 竹下	けいこ 景子	俳優
◎なかがわ 中川	しろう 志郎	(財)日本動物愛護協会理事長、(財)日本博物館協会会長、茨城県自然博物館名誉館長、元上野動物園園長
ふじさわ 藤沢	くみ 久美	シンクタンク・ソフィアバンク副代表
まき 牧	しんいちろう 慎一郎	NPO 法人市民 ZOO ネットワーク代表理事
ますい 増井	みつこ 光子	よこはま動物園園長、兵庫県立コウノトリの郷公園園長、麻布大学客員教授
まつざわ 松沢	てつろう 哲郎	京都大学霊長類研究所教授
やぎゅう 柳生	ひろし 博	俳優、日本野鳥の会会長

※ 肩書きは委嘱時点のものです。

(2) 検討経過

第1回	開催日：平成17年8月11日 視 察：東山動植物園視察 議 題：動植物園のあるべき姿について
第2回	開催日：平成17年10月11日 議 題：構想の基本的な考え方について
第3回	開催日：平成17年12月13日 議 題：提言の素案について
第4回	開催日：平成18年3月20日 議 題：提言について